予備教育の日本語コース運営のために考えること

大 坪 一 夫

はじめに

留学生教育センターでの外国人留学生にたいする日本語教育活動のなかで，予備教育の日本語コースは，ほかのコースとは異なる位置にあるということをまず確認しておく必要がある。なぜならば，このコースは，本学以外の学生も収容しており，学外の日本語教育施設を持たない，あるいは，施設を持っていてもかなり手薄な状態にある大学へ学生を送り出さなければならないからである。学生は，このコースを出たあとは，日本語の問題をすべて自分の力で解決していかなければならないのだから，どうしても，それができる水準まで学生の力を引き上げておかなければならない。簡単に，「それができる水準」ということばを使ったが，それでは，その内容はと言われると簡単ではなくなる。以前，私は国内の９大学の外国人留学生の指導教官を経験したことのある教官を対象に，６か月の集中コースの目標水準についてのアンケート調査に，調査研究員の１人として参加したことがあるが，その結果わかったことは，人により，立場によって考え方はまったく異なるという実に当然のことでしかなかった。つまり，予備教育の日本語コースは，仕様書なしに製品を作って，それを親会社に納入している下請け会社のような立場にあることになる。

そうであれば，仕様書は，自分で作らなければならない。そして，それならば，現在の自分たちの能力で可能な限り高い能力を備えた学生を育てることを狙いとするべきであろう。そして，そのように狙いを定めたならば，現状の予備教育の日本語コースが明示されてはいないが，しかし感じとして知っている仕様書に照らして，十分に満足できるほどうまくいっていないことを素直に認め，その不成功の原因は何かということの追求から仕事を始めなければならない。しかし，その原因の追求は非常に困難である。なぜならば，もし何が原因かを知っていれば，その原因についてすでに何かの手を打っていたであろうし，もしそれを知らなければ，それを探し出すチェックリストのようなものを手元においておかない限り，どこから始めればよいかさえもわからないからである。だから，コースの改善のために，何を研究すればいいのか，そのことがまず重要な問題になる。ところが，自分の知らないことが何であるかを知ることは，原理的には不可能である。しかし，そうも言ってはいられないので感想文となること，見当違いの愚問を発すること，どこかの日本

語教育機関ではとっくに解決済みの問題についての質問であることなどを恐れずに，以下自分の知りたいと思っていることを書きつらねてみることにする。

1．評価という観点から

名古屋大学にいたときに，1人の農学部の教授とお話しする機会があった。先生は分子レベルでの植物の研究では，日本のトップをいっておられる方で，その研究内容についてのお話もおもしろかったが，自分の研究結果についての試験農場での評価を聞かされる時ほど緊張することはないというお話には，特に強い感銘を受けた。土の上でしか，我々の研究の最終評価は出ないのですよということばには，強い説得力を感じた。

私たちにとっての農場は，一つ一つの授業であり，それが自分の能力ないし研究の試験場である。ある説明が優れているかどうかは，その説明を受けた学生がその後に示す行動によってのみ評価されるべきだろう。その他の評価基準があったとしても，日本語能力の高い学生を育てるという目的を持っている我々にとってはさして重要であるようには思えない。というのは，我々にとってのいい説明というのは，言語学者のいう意味での正しい説明である必要はない。時には嘘の説明のほうが効果的だということが十分にあり得るからである。また，同じ説明をどう表現するかということも，同様に重要である。一般的に言って，言語学的記述は，一つの論の中で整合性をもたなければならず，またなんらかの行動を指示するようなスタイルでは書かれていない。我々にとって必要なのは，学生が読んで，それに従ってなんらかの行動を起こせるような，例えば，料理の作り方のような表現法であろうと思うが，それが何かということにも研究の余地がある。法律の文章が読みにくいのはなぜかというのと同じ価値のある重要なテーマであるように思う。我々が試験農場的な独自立場から，我々の目的に即した合目的的評価基準と評価法を手に入れることは，コースの改善のために非常に大切である。

学生の日本語能力，逆にいえば，我々自身の日本語教授能力を評価をするには，我々が何をもって優れた日本語能力とするかを十分に煮詰めておかなければならない。優れた日本語能力の持ち主がどんな人物であるかを詳細に記述されていなければ，評価をしようにもしようがない。このことから，何を教えてどんな能力の持ち主を育てるべきかという根本的な問題が出てくることになる。シラバスを作ることの重大さがここにある。シラバス論は，本誌の田辺氏の論文に詳しいのでここでは触れないが，その重要性はいくら強調しても強調しすぎることはないように思う。そして，そのシバラス自体が評価の対象となる

ことも忘れてはならない。教授法，教具の使用法についての改善は，再びシバラスの評価・検討を促すことになるであろう。

教授項目が定まれば，その項目をどう教えるかが次の重要な問題になる。現在までに様々の教授法が提案され，さらに新しい教授法が提案され続けているが，どうも決定的なものは現れていないような気がする。教授が学生という変数，学習環境という変数，教師の個性という変数など常に変化する多くの変数によって左右されるものだから，外国語教育一般に通用する決定的な教授法が現れるのを期待するほうが無理なのかもしれない。しかし，特定の目的，特定の環境，特定の教師の集団という限定が加わってくれば，特定の学校にとって，最適な教授法を見つけ出すことは可能になるかもしれない。重要なことは，それを見つけ出す努力を無駄なく続けることであろう。そして，ここでも評価法の確立が重要になってくる。同じ量を教えるためには，教える時間が短ければ短いほどいいし，時間が同じならば，教える量が多ければ多いほどいいという極くあたりまえのことなのだが，それを測らないことには，どんな方法を取った時にどうなったかがつかめないことになる。それでは，どうやって測るかという段になって，問題が出てくる。測定の対象となる学生の数が統計的に意味のある数に較べて圧倒的に少ないという問題である。その問題を克服するためには，何か新しいやりかたを考えなければならないだろう。どういう方法があるか。幸い，自分で考えてみても，また仲間内の雑談を考えてみても，我々は一つの直感を持っているように見える。「去年のＡさんのようだから伸びるに違いない。」というのがその直感の言語的表現である。例えば，この直感の元となった判断の材料をもっと細かく紙の上に表わせば，それが一つの評価表となるかもしれないと思うが，どうだろう。これは，非常に重要な研究テーマになりそうな気がする。あやふやなデータから結論を引き出す人間の推論という，人口知能の研究分野に入って来るほどのテーマかもしれない。それほどおおげさに考えなくとも，これが完成すれば，多くの同じ問題をかかえて悩んでいる日本語教育機関にとって，大きな助けとなることは確かだと思う。

２．教具・教材の観点から

Ｌ．Ｌ．という教具がかつては個別指導の雄としてもてはやされた時代があった。テープレコーダーが学生の収入ではとても所有できない時代であったからである。しかし，現在の日本では，最早手軽な娯楽用の機器として各家庭に何台かは用意されている。例えば，私の家にも７台のテープレコーダーがあり，子供は寝る前にそれで音楽を聞いている。Ｌ．

L．が現在かつての地位を退いたのは，簡単にいえば学習者の反応に的確に追従できないということに原因がある。今L．L．のかわりに個別指導の英雄になろうとしているのがパーソナルコンピュータである。ソフトがなければ，ただの箱がソフトを得てすごい箱になるかどうかは，我々がその箱をどう利用しようとするかに係わっている。

今，私が知る限り，学習者の反応に応じて様々な次の手が考えられるのは人間か，計算機かのどちらかである。その二つのうちで，どちらがより効果的かと考えると，これは，なかなか難しい問題になる。このこと自体も研究の対象となる大問題である。なぜならば，ある極端な見解からは，もう人間の先生はいらないというような口ぶりの人がいるいっぽう，計算機などどうにもならない馬鹿であって，とうてい人間のような柔軟性をもつことは期待できないと諦めてしまっている人もいるというのが現状ではないだろうか。どちらの立場も極端であり，どちらの意見にも耳を傾けるべき根拠がないように思う。十分検討した結果の意見ではないからである。日本語教育の世界で，計算機を活用しているのは，現在のところ国内では，名古屋大学のみであろうと思うが，ここからも十分なデータに基づく人間と機械の長所，短所の比較についての報告は出ていない。しかし，授業時間の1割が計算機を使ったものとなっており，それをやめてしまおうという意見は現在のところ出ていない。むしろ，学生の需要が多すぎて，機械の台数の少なさが問題になっているのが現状であるという話を聞いている。つまり，我々の現状の1割程度の時間を計算機にとってかわらせることが可能らしいということはできよう。

現状の機械では，例えば音声を出力して，それに対するキーボードからの入力の正否を判断すること，ＣＲＴに文字を含むなんらかの図形を出力し，それに対するキーボードからの入力の正否を判断すること，レーザーディスクを制御して，静止画，動画などを出力し，それに対する質問などに，キーボードなどから学生に解答させ，その解答の正否を判断することなどは十分に可能な計算機の利用法であろうと考えられる。しかし，学生の音声による入力を的確に判定して，それに点数を与えるといったことは，現在のところとうてい機械にまかせられることではなさそうである。東北大学は音声の面での計算機の利用に注目しているが，現在のところ学生の発音のＦ$_0$曲線をＣＲＴ上に描かせて，それとモデルのＦ$_0$曲線を学生に比較させるとか，フォルマント周波数の比較をさせるといったところまでが可能な範囲であり，それが学生にどの程度有効な情報となるかといったところまでは，調べがついていない。しかし，ある程度の時間の経過とともにこのへんまでは計算機で教えることが可能になるかもしれない。人間の教師の柔軟性は時には不正確と同一

であることがあり得る以上，正誤の判断が機械的に可能な場面での機械の利用は，人間の能力をかなりよく補ってくれるように思う。

計算機が人間よりも優れている点は，疲れないということであろうが，さらに検索能力が人間よりも高いといった面も見逃せないだろう。現在のところ，教科書の本文にあたる部分は，ある課を教えるときと，試験前の復習の時までは省みられることが少ないというのが現実ではないだろうか。しかし，もしインデックスの強力なものを用意しておけば，例えば，「この漢字，読めますか。」という文一つを文法事項としては，可能の文，有題文，助詞の省略された文等の例として，また要求という機能の例文としては，「この漢字の読み方を教えてください。」「この漢字は，どう読むんですか。」「この漢字は，何と読むんですか。」などと同一の機能を持つ文の例として，漢字の例としては「漢」，「字」「読」「漢字」「読む」の例としてなど，様々な使い方ができる。言語の学習がどうしてもオーバーラーニングに頼らなければならない以上，計算機のこのような能力を使わないのは損と言うものではないだろうか。同じテキストを，旅行者用の会話教本として使ったり，文法の例文集として使ったり，同じ機能の例文集として使ったりすることは，計算機のもつ優れた検索機能を使えば，それほど実現の困難なことではないように思う。もしこれが可能であれば，順番のない教科書が実現するであろう。それがどのような体裁になるのか，紙には何を書くのか，フロッピーディスクには何を書くのか，光ディスクには何を書くのか，学生の進歩の度合いをどう記録し，どう評価するのか，学生をどう組織するのか，教師の役割は何かなど一切を研究することは言語教育に関する大きな貢献となると思われる。外国語教材といえば，紙に書いたテキスト，文法注，ドリル，録音テープといった常識は１度捨ててみることも重要なことであるように思う。

上に述べた教材と教具の利用は，まだどこでも始まっていないものである。下敷きはない。唯一の下敷きは，教育を効率的にするためには，システマティックに行わなければならないというコンセプトにすぎない。だから，研究が泥沼状態になってしまう危険は多いにある。しかも，１．で述べた評価機能が十分に機能していなければ，結果的に学生に迷惑をかけることが十分ありうる。研究の細部は，現状では十分把握できていない。多くの試行錯誤も覚悟しておかなければならないだろう。しかし，だからこそやってみるに価する研究だといえるのではないだろうか。これをどう組織的にまとめていくかというところから考えるのはなかなかおもしろいと思う。実際の教育とその研究にどのようにＰＥＲＴの手法を応用するかといったことも十分に価値のある研究であろう。

3．教授法の観点から

教授法については，すでに1．で簡単に触れた。同じものを様々な角度から見ていると，同じことを循環的に何度も繰り返してしまう。そのことは，許していただかなければならない。

決定的な教授法があるかといわれると，実のところわからないというのが正しい答えだろうと思うが，敢て暴論をはけば，否である。その理由を考えてみることにも何かの意味があるだろう。

ドイツ語を教えている友人が話してくれたエピソードを一つ紹介しておく。彼のクラスにインドネシア人が一人混ざっていたことがあった。1年の最後の授業が終わったときに，その学生がやって来て「私は先生の授業に1年出たが，一言もドイツ語が話せるようにならなかった。残念である。」と言って，教室を出ていってしまった。あんなに驚いたことはなかった。今まで何百人の日本人学生を教えたが，話せるようにならなかったと言って文句をいいに来た学生は1人もいなかった。だから，話せるようにしようと思って教えたことは，1度もなかったというのである。これは，外国語学習に対する目的意識が日本人とインドネシア人の学生の間で，いかに違うかをみごとに示す例であるように思う。エピソードをもう一つ。中国人と日本人に英語を教えているアメリカ人が一つのクラスに入っていた。私が中国人に教科書を見るなと何度もいうのを聞いて，そのアメリカ人は，東洋人は目で勉強するのが好きですねと話してくれた。日本人の学生もそうだとそのアメリカ人は言った。実際，日本語教育学会が実施した「日本語能力認定試行試験」でもその傾向は明白に見られた。西洋人は，耳で習うという傾向も同じように出ていた。東洋人は，肉体的に目が優れ，西洋人は耳が優れているというようなことはまず考えられないから，これは，外国語をどう習うかについての東洋人と西洋人の考え方の違いだと考えるべきであろう。社会によって，外国語を習う目的，学習の方法が違っていることを上の二つの例は示しているように思う。外国語をそれぞれの社会がどのようなものとして取り扱うのかという問いは，社会言語学の一つのトピックとして研究する価値があるだろう。

ここで言いたいことは，学生によって日本語を習うやりかたが様々であり，教授法は学生という変数によって，その有効性が左右されるものであるということである。我々は，このような事情を考慮して，ある型の学生にはある種の教授法を，別の型の学生には，別の教授法を取るというような柔軟性ももたなければならないのではないだろうか。

今までに言われてきている学習者の言語的背景という要素に加えて，学習目的，方法な

ど様々の面での学習者の違いに適応できる体制を実現するためには，学生をいくつかの型にわけ，その型にあった教授法を探るといった研究が必要になるように思う。型がいくつあるのか，それぞれの型はどんな性質を持っているのかなどということは，現在のところまったくわからない。まして，それぞれにふさわしい教授法がどんなものなのかということは，考えられたこともないのではないかと思う。

おわりに

特に結論めいたことは何もない。しかし，良い授業を展開していくためには，まだまだ調べなければならないことが多いというのが述べたかったことである。もちろん，文法，文字，音声というような言語そのものについての研究をないがしろにすることはできないし，その分野からの情報を無視することはできない。しかし，それだけでは不十分である。それ以外にも予備教育の日本語の授業の改善という我々の目的のために調べておかなければならないことが山ほどあり，その一つ一つがどれも非常に興味のある，重要な研究課題であるというのが結論といえば結論である。